

小学館
からの
お知らせ

1/4

速報

第21回

「小学館ノンフィクション大賞」 最終選考結果のお知らせ

大賞

該当作品なし

優秀賞

『産めない先進国 ——世界の不妊治療現場に行く』

宮下洋一(みやした・よういち)

『ゆめいらんかね ——やしきたかじん伝』

角岡伸彦(かどおか・のぶひこ)

小学館は本日、『週刊ポスト』『女性セブン』『SAPIO』3誌主催による「第21回小学館ノンフィクション大賞」の最終選考会（午後6時から、パレスホテル）を行い、受賞作を決定いたしました。

今回は優秀賞に2作品、宮下洋一『産めない先進国 ——世界の不妊治療現場に行く』と角岡伸彦『ゆめいらんかね ——やしきたかじん伝』を選考しました。大賞の該当作品はありませんでした。

優秀賞受賞者には、賞金として100万円が贈られます。

第21回

『小学館ノンフィクション大賞』
最終選考結果のお知らせ

主催 (株)小学館 週刊ポスト／女性セブン／SAPIO

優秀賞

『産めない先進国 ——世界の不妊治療現場に行く』

宮下洋一(みやした・よういち)38歳

現住所：スペイン・バルセロナ 職業：ジャーナリスト

【プロフィール】

1976年2月2日、長野県生まれ。米ウエスト・バージニア州立大学外国語学部を卒業。その後、スペイン・バルセロナ大学大学院で国際論修士、同大学院コロンビア・ジャーナリズム・スクールで、ジャーナリズム修士。6言語を話す。著書に『外人部隊の日本兵』（並木書房）がある。

【梗概】

「第三者卵子提供」、「出自を知る権利」——。日本でここ数年、不妊治療をめぐる議論が喧しい。それは、この国には未だ法律が存在しないからだ。

スペイン在住の筆者は、ある日、バルセロナで『卵子提供のフリーダイヤル』という日本語のポスターを目にする。「なぜ、誰のために?」という素朴な疑問から、いつしか、世界6カ国に亘る不妊治療現場の旅に出る。異なる価値観を持った、各国の医師や専門家から技術や制度を教えられる一方、不妊に悩む女性たちの体験に耳を傾けた。

スペインでは、日本では許可されない「第三者による卵子」を使って治療を行う日本人女性たちが急増していた。不妊を「疾病」と見なすフランスでは、日本とは異なる保険適用制度により、患者の経済的負担はほとんどないが、実は大きな「落とし穴」があった。

「技術は世界最高だが、妊娠率は世界最低レベル」といわれる日本では、加藤レディースクリニック、浅田レディースクリニック、諏訪マタニティークリニックと、国内屈指の実績を持つ三大クリニックを訪問するも、筆者の疑問はさらに膨らむ。

「自由な診療」で知られるアメリカでは、大金を払って子供を「デザイン」することもできる。米大手クリニックや学会元理事長らとの話から、「患者中心主義」を謳うこの国の不妊治療の限界を見た。

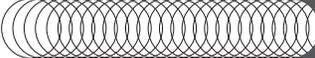
タイでは「男女産み分け」をも可能にする最先端技術（着床前診断）の闇に踏み込む。誰がための不妊治療か——辿り着いた疑念を解決する糸口を探るべく、スウェーデンに飛び、不妊治療の本質が何であるのかに迫った。

6組に1組が不妊に悩む「産めない先進国」。各国の専門医や患者の証言を経て、子を授かることの意義を探りながら、日本で起きている不妊治療論争を多角的に論じる。

第21回

『小学館ノンフィクション大賞』
最終選考結果のお知らせ

主催 (株)小学館 週刊ポスト／女性セブン／SAPIO

 優秀賞 

『ゆめいらんかね ―やしきたかじん伝』

角岡伸彦(かどおか・のぶひこ)50歳

現住所：大阪 職業：ジャーナリスト

【プロフィール】

1963年8月6日、兵庫県生まれ。関西学院大学を卒業後、神戸新聞記者を経てフリーへ。著書に『被差別部落の青春』、『ピストルと荊冠〈被差別〉と〈暴力〉で大阪を背負った男・小西邦彦』など。11年、『カニは横に歩く 自立障害者たちの半世紀』で講談社ノンフィクション賞受賞。

【梗概】

今年一月三日、歌手でタレントのやしきたかじんが食道ガンで死去した。

一九四九年に大阪市西成区の下町で生まれたたかじんは、家庭の事情などから、早くも高校生のころから自分の進路を決め、夢を実現する努力を怠らなかった。中学時代に音楽に目覚め、大学時代にフォークソングサークルに所属し、作曲活動を始める。

やがて京都・祇園のクラブ、スナックで契約歌手として歌い始めた。二十七歳でレコードデビューを果たすが、いっこうに売れず、歌うことを断念する。しかし、最後の記念にと出場したコンクールでグランプリを受賞。

その後、音楽事務所に所属し、上京するも歌手としてはやはり芽が出ない。結局、大阪に舞い戻り、個人事務所を開設する。「関西では歌手だけでは食べていけないよ」という放送局幹部にアドバイスされ、どんな仕事も引き受けるようになる。以後、しゃべくりの面白さが認められ、ラジオ、テレビで人気を得ていく。歌手としても『やっぱ好きやねん』『東京』などのヒットを飛ばすが、体力的・精神的な限界から五十代以降はタレントに専念するようになった。

本書では、タレントと歌手の間で揺れ動いたかじんの心境が関係者の取材によって、明らかになっていく。また、幾度も東京進出を企図し、その都度、失敗に終わったことによって募ったコンプレックスなどにも踏み込んでいる。

たかじんの六十四年の人生は、人に恵まれたと言える。歌手としての才能を見出したレコード会社の宣伝マン、マネージャーとして歌手・タレント活動を支え続けたマネージャー、歌手の夢を追うため励まし続けた最初の妻…。彼らの人生やたかじんに対する思いを交えながら、歌手・タレントのやしきたかじんの生涯を追った。

【第21回「小学館ノンフィクション大賞」について】

21回目を数える今回は、本年4月末日に募集を締め切り、200作品を超える力作が寄せられました。この中から次の5作が、本日午後6時からパレスホテルで開かれた最終選考にかけられ、椎名 誠、関川夏央、高山文彦、二宮清純、平松洋子の各選考委員により受賞作が決定いたしました。

【最終候補作】

- 『海を渡る野球小僧』
喜瀬雅則
- 『産めない先進国 ——世界の不妊治療現場に行く』
宮下洋一
- 『潜入ルポ! 築地市場 サカナの錬金術』
鈴木智彦
- 『ボリショイ卒業 ——ロシア・バレエの頂に挑んだダンサー』
大前仁
- 『ゆめいらんかね ——やしきたかじん伝』
角岡伸彦

- 賞金：大賞=500万円（複数受賞の場合は分割） 優秀賞=100万円
- 発表：受賞作は8月中旬発売の『週刊ポスト』『女性セブン』、9月4日発売の『SAPIO』誌上、および小社ホームページで発表いたします。受賞作は単行本として刊行予定です。
- 選考委員：椎名 誠（作家）、関川夏央（作家）、高山文彦（作家）、二宮清純（ジャーナリスト）、平松洋子（エッセイスト）

【小学館ノンフィクション大賞】

「小学館ノンフィクション大賞」は、1993年、創刊25周年を迎えた『週刊ポスト』が『SAPIO』とともに、21世紀へ向け新しい感覚で時代を切り拓いていく新進気鋭のライターの登龍門となるべく、「21世紀国際ノンフィクション大賞」として新設、第7回より「小学館ノンフィクション大賞」と改称したものです。受賞作は『狂気の左サイドバック』（第1回）、『乳房再建』（第2回）、『絶対音感』（第4回）、『まぐろ土佐船』（第7回）、『ネグレクト』（第11回）など、このジャンルでは異例のベストセラーとなっていることから、当賞がノンフィクションの新しい地平を拓き、新しい才能を発掘するものであることを示していると自負しております。募集作品は未発表作品に限り、海外冒険旅行や、博物誌、観察記、歴史発掘、ビジネスドキュメント、スポーツドキュメント、科学ドキュメントなど、さまざまな視点から「時代」を捉えたものを、国内外を問わず広く世界から求めます。原稿枚数は、400字詰め原稿用紙200～300枚程度で、応募資格は、プロ、アマ、性別、国籍、年齢は問いません。